Library News Letter

YAMAGUCHI UNIVERSITY 山口大学

Oct.2016

読書の秋特別号

Enjoy reading!

図書館専門委員会の先生方が選んだ、読書の秋におすすめの一冊

秋の夜長にゆっくり本を読んでみませんか？

今回は、各学部を代表して山口大学の図書館運営に携わる図書館専門委員会の先生方に、学生のみなさんに読んでほしい一冊をご紹介していただきました。これまで読んだことのない新しい出会いがあるかもしれませんよ。是非手にとってみてはいかがでしょうか。

山口大学図書館長　根ヶ山徹先生のおすすめ

『読書の学』
吉川幸次郎著．筑摩書房，1975
（総合図書館所蔵）

「読書の学」とは「一一の書の一一の言語表現そのものに即し、その外にむかってひろげる波紋、更には内にむかってうずまく波紋、つまり一一の言語表現にまつわる無限に複雑なもの、それを静かに追求する仕事」。例えば、『論語』子罕篇「逝く者は斯の如き夫(かな)、昼夜を舎(とど)めず」の「逝く」は、うつろいゆく時間への孔子の悲観の語であるか、不断の成長進歩を示唆する楽観の語であるかをめぐる思索。「生生の無窮」をいう強気の言葉であるとする朱子など宋儒の誤謬を指摘し、弱気な詠嘆の言葉であるとの契沖、荻生徂徠の説に基づき、「『昼夜を舎めず』といいつぐこと、これはたくましさへの賛辞とひびき得る」、という結論に至るまでの追求を、引用文を読み飛ばさずに追体験してほしい。

総合図書館副館長　柏木芳美先生のおすすめ

『市場を創る　バザールからネット取引まで』
ジョン・マクミラン著．ＮＴＴ出版，2007
（総合図書館所蔵）

「市場」（しじょう）というのは、「いちば」も含めて、経済学における重要なテーマの一つである。この本は、最近話題のネット取引やオークションまで幅広く、市場に何ができて何ができないのか、市場がうまく機能する場合と機能しない場合などを、具体例を中心に考察している。例えば、市場が機能するためには特許権が保護される必要がある。一方、エイズ薬は高価なため、必要としているアフリカの人々の手に入らない。この問題がアフリカで実際にどのような展開を見せたのか、というようなことが紹介されている。この本は一般向けに書いてあるので予備知識は必要ない。著書はオークション理論などを専門とする経済学者で、米国連邦通信委員会の電波周波数帯オークションの設計にも携わっている。

今日は何を読もうかな～♪

人文学部　下宮正利先生のおすすめ

『言葉を復元する』
吉田和彦著．三省堂，1996
（総合図書館所蔵）

本書は、比較言語学、すなわち言語の系統論の入門書です。同じ系統の言語を比較し、どのような祖語が再建されるか、またその祖語から各言語が分化する際、どのような変化が起こったかを研究するのが比較言語学ですが、その方法論がかなり分かりやすく説明されています。比較言語学の研究をするためには、本来、様々な言語に関する膨大な知識が必要になってきますが、そうした知識の無い人でも、理解できるよう書かれています。本書は、インド･ヨーロッパ語族しか扱っていませんが、基本的な方法論は、他の語族を研究する際ももちろん同じです。文献資料が現れる以前、それぞれの言語の形がどのようなものであったのか、そしてそれがどのようにして突き止められるのか、興味のある方には必読の一冊です。

経済学部　中村美紀子先生のおすすめ

『憲法の無意識』
柄谷行人著．岩波書店，2016
（総合図書館所蔵）

法律とは無縁でいたいと考える学生であっても、「憲法」が自分に関係ありそうと感じ、それを変えようという動きがあることは知っていよう。選挙権 18 歳以上で参院選が行われた本年であればなおさらである。

本書は憲法を語る本ではあるが、法律学で語らない。憲法学ではなく憲法論を説くものである。

戦後憲法の問題点をみるためには後期フロイトの認識が必要であるとし、憲法を建築に擬え、徳川幕府と戦後日本の体制の類似点を挙げ、同法９条が含意するのは、カントが明確にした普遍的な理念であり、それがなぜ日本において制度として定着したのかを示す。その上で、本法９条は無くなることはないと予言する。

「憲法って、本気で考えてみないとやばいかも」、本書はそのように思う学生をなるほど！と納得させる一冊である。

大学院創生科学研究科（理学系）増本誠先生のおすすめ

『Relativity in Illustrations』
Schwartz,Jacob T.著．Dover Publications，1989
（総合図書館所蔵）

E=mc2 を紹介するアインシュタインに記者の質問が飛ぶ。「それは何の役に立つのですか。」「この式は美しい。それだけで十分価値がある。」アインシュタインの生涯を描いたテレビドラマの一場面である。相対性理論の描く奇妙な世界をテレビや書籍で知った人も多いだろう。その世界にいかにして到達したかを知ろうとして相対性理論の専門書をひもといてもマックスウェルの方程式やらローレンツ変換やらに行く手を阻まれてしまう。ここに紹介する本は、等速運動する慣性系の間において物理法則は互いに不変であるはずという相対性原理と光速度不変の原理から出発し、高校程度の幾何学のみを用いて特殊相対性理論の世界に我々を案内してくれる。空間次元は１次元に限られるが、演繹的にしかも平易に議論が展開され、特殊相対性理論の真髄に触れることが出来る。原子力ばかりでなくスマートフォンなどに搭載されている GPS 機能にも相対性理論が応用されている。「何の役に立つか。」愚問であった。

大学院創生科学研究科（農学系）赤壁善彦先生のおすすめ

『化学で「透明人間」になれますか？人類の夢をかなえる 最新研究 15』
佐藤健太郎著．光文社，2014
（工学部図書館所蔵）

一般に、化学（ばけがく）は、危険、怪しい、マニアックといったイメージがあるかもしれませんが、天然の物質を自由に作ったり、これまで存在しなかった物質までも作り上げることのできる学問です。実は、われわれの生活に密着し、医療、エネルギー、環境問題を解決しています。その化学の最前線は、一体どうゆうものなのでしょうか。今までは、夢物語や実現不可能と思われていたことも、化学者の力で実現しようとしています。その例として、宇宙旅行をするには、痩せるには、頭が良くなるには、長生きするには、癌を治すには、エネルギー問題を解決するにはなど、その他身近で関心の高い内容をテーマに挙げて述べています。文章は、会話形式で平易に書かれており、専門用語には別途、説明文が付いています。化学に興味があるヒトには勿論の事、化学の苦手なヒトにも十分理解できる内容ですので、ぜひ、化学の面白さ、奥深さ、不思議さに触れてください。

国際総合科学部　堀家敬嗣先生のおすすめ

『明るい部屋――写真についての覚書』

ロラン・バルト著；花輪光訳．みすず書房，1997

（総合図書館所蔵）

近代科学は、諸現象から一定の法則を見出し、一般性の枠組みを抽出することによって世界を把握してきました。いわゆる自然科学のみならず、それは人文科学においてさえも同様です。そしてこうした科学的な態度が、とりわけ産業革命以降の私たちの生活を、より快適かつより効率的に進歩させてきたことも事実です。

なるほど、出来事はつねに新しいものとして私たちの前に現われ、世界は絶えず更新されていきます。しかしながら、砂粒ひとつにも新鮮な驚きをもって接する幼児のように、世界のうちに生じるあらゆる些事にまでいちいち耳目を凝らしていては、私たちは日常を平穏に過ごすことはできないでしょう。

絶えず更新される世界は一般性の網目ですくわれ、そこに残された出来事の抜け殻こそが世界として認識されるその仕方で、私たちは、今日も昨日と同じ一日であったことに安心し、明日もまた今日と同じ一日であろうことに安堵します。

そうして把握され、認識される世界のありようを、バルトは"studium"と呼びます。それは、誰もが努めて知ることができ、それゆえ誰にとっても共有可能な世界です。

けれどやはり、一般性の網目は、これがどれほど細かく編み上げられたところで、そこですくい損なわれてしまうものが存在します。それは、出来事に唯一無二のかけがえのなさを保証し、その個別性の担保となる"細部"および"時間"です。

小説や絵画、音楽や演劇をはじめ、写真や映画に至るまで、いわゆる芸術的な体験の本質は、しばしば網目をくぐり抜けたものの側に存しています。誰もが容易に共鳴できる感動などといった生ぬるい経験ではなく、刺すような痛みをともなって私を不意打ちし、圧倒し、茫然自失させ、私が私であることの自明性を揺るがしてその同一性を不安に陥れるような、にもかかわらず私のほか誰もこれを共有できないような、きわめて個別的な体験、それを、バルトは"punctum"と名づけます。

芸術的な体験とは、したがって本来は近代科学による捕捉と分析の対象ではありえないにもかかわらず、たとえば日本の文学の現場においても、夏目漱石の『文学論』以来、実に多くの論者が芸術的な体験の体系化を、その理論化を試みてきました。あらかじめ失敗することを承知のうえで、なお彼らの言説がその敗北をあえて背負ってみせるのは、おそらく、この失敗、この敗北の痛みもまた、ひとつの"punctum"にほかならないからでしょう。

『明るい部屋』とは、一枚の写真に憑かれたバルトが、自らの失敗を、その敗北を、誇らしくも高らかに宣言する書物です。

埋蔵文化財資料館　田畑直彦先生のおすすめ

『アフリカの陶工たち　伝統工芸を追って二十年』

森淳著．中央公論社，1992

（総合図書館所蔵）

本書では、著者が 1968～1989 年に行ったアフリカの土器づくりの調査について、当時の社会情勢や土器づくりに関わる陶工・儀礼などと合わせて、紀行文で分かりやすくまとめられています。また、アフリカでは生活の近代化に伴い、土器づくりが衰退しつつあることが随所で述べられており、刊行後 24 年を経た現在、アフリカにおける伝統工芸の貴重な記録となっています。

土器は、粘土が可塑性に富むため、幾つかの原則を守れば多様な方法で成形することができます。本書によれば、当時のアフリカでは 6 通りの成形技法が確認されており、一部については国立民族学博物館の「ビデオテーク」で映像を視聴することができます。それらの多様な在り方は驚くべきもので、成形以外も同様です。

日本とアフリカとの関わりは、今後も一層深まるものと思われますが、本書を通して多様なアフリカの文化の一面を感じていただければ幸いです。

企画展示のお知らせ

今号で紹介された本や、関連する資料を各図書館で展示します。
貸出もできますので、是非図書館まで足をお運びください。
また、最寄の図書館に所蔵がない場合は、取り寄せも可能です。

展示場所

総合図書館	1 階新着図書コーナー
医学部図書館	1 階カウンター付近
工学部図書館	1 階展示コーナー

Library News Letter　通号 18 号　2016 年 10 月発行図書館 HP http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/
編集・発行　山口大学図書館　〒753-8511　山口県山口市吉田 1677-1　TEL083-933-5183/FAX083-933-5186